

# 本学初年次スポーツ学生の直接スポーツ観戦参加の実態

## —高校時の居住地（岐阜地域と東海地域）による相違—

古田 康生（岐阜協立大学経営学部）

キーワード：みるスポーツ、直接スポーツ観戦、地域特性

### 1. はじめに（研究の背景と課題の所在）

#### 1.1 みるスポーツに関する背景（第2期スポーツ基本計画以降の環境変化）

2011年にスポーツ基本法が施行された後、スポーツ基本計画の策定が進められ、2025年の現在は、第3期スポーツ基本計画が進行中である。平成29年度に策定され、令和3年度まで運用された第2期スポーツ基本計画では、スポーツ政策としてスポーツを“する”だけでなく、“みるスポーツ”、“ささえる（育てる）スポーツ”といった多様な形での「スポーツ参画人口」を拡大・増加させ、スポーツ界が他分野との連携・協働を推進することで、「一億総スポーツ社会」の実現に向けて取り組むことが明記された<sup>10)</sup>。ここで、スポーツ基本計画に明記された「みるスポーツ」、すなわち、スポーツ観戦およびスポーツ鑑賞（以下、観戦・鑑賞とする）には、大別して、各競技種目の試合や大会が実施されるスタジアム（競技場）やアリーナ（体育館）などに出向いて直接的にそのスポーツ種目を観戦する方法（以下、観戦とする）と、テレビやラジオ、インターネットなどを利用してスポーツを間接的に鑑賞する方法（以下、鑑賞とする）の2つの方法が挙げられる。直接的なスポーツ観戦の対象となるのは、野球であれば一般社団法人日本野球機構のプロ野球、朝日新聞社や毎日新聞社と公益財団法人日本高等学校野球連盟が阪神甲子園球場を舞台に開催する全国高等学校野球選手権大会（通称、夏の甲子園）、選抜高等学校野球大会（通称、センバツや春の甲子園）などといった高校野球が対象となる。また、サッカーであれば公益社団法人日本プロサッカーリーグのJリーグなどが代表的である。その他にも国技として広く知られる日本大相撲協会が主催する大相撲もそれに該当する。近年では、バスケットボールのBリーグやバレーボールのVリーグなど一般社団法人日本トップリーグ連携機構に加盟する13の競技団体などもトップスポーツリーグにより直接スポーツ観戦の機会を提供し、日本での「みるスポーツ」の環境は充実してきていると考えられる。

#### 1.2 みるスポーツに関する背景（岐阜地域の観るスポーツ環境の変化）

近年、岐阜地域の直接スポーツ観戦の環境は大きく変わった。その最大の要因は2022年4月に『G I F Uトップチーム連携プロジェクト「G I F U N I T E（ギフユナイト）」』が組織されたことにある。これによりこれまでチーム・クラブ単体で実施していた試合日程や試合会場といった告知・広報やその競技種目の普及（主に子どもを対象とした種目の体験活動）といった種々の活動が種目横断的に実施されることとなった。例えば、加盟チーム・クラブのイベントや試合（リーグ戦）などで、他の競技種目の体験ブースや紹介パネルの設置や競技を超えた選手同士の情報発信、あるいは合同での次世代アスリートの育成を目的にした指導や普及イベントの開催などが実施されるようになった。それにより、これまで目的とするスポーツ種目をスタジアムやアリーナにて直接観戦するだけであったのが、その他の加盟チーム・クラブの試合日程や試合会場の情報、選手個人の情報、チームに関する情報を目にすることが可能となり、他の競

技種目の直接観戦の機会も拡大した。また、この組織に報道各社が加わることで活動のメディア露出が増加した<sup>6)</sup>。以下に「GIFUNITE (ギフユナイト)」概要を示す。

#### 「GIFUNITE (ギフユナイト)」の概要

##### 1. 設立目的

『スポーツ立県・ぎふ』を目指す施策の一つとして、トップチームをはじめとする各団体が連携・協働することにより、スポーツで岐阜県を盛り上げ、スポーツを『する』『観る』『支える』県民との多様な交流を通じて、地域活性化と様々なスポーツを楽しめる文化を創造する。

##### 2. 加盟団体

岐阜県内に活動の本拠地を置いている日本のトップレベルであるプロリーグまたは日本リーグ等に参戦しているトップチームが加盟します。9競技種目の13チーム・クラブが加盟する。

バレーボール：JAぎふリオレーナ（Vリーグ）・サッカー：FC岐阜（Jリーグ）・ソフトボール：大垣ミナモトソフトボールクラブ（JDリーグ）と日本エコシステム（男子ソフトボール）・フィールドホッケー：ソニーHCBRAVIALadies（女子リーグ）・岐阜朝日クラブ（男子）・東海学院大学女子ホッケー部・バスケットボール：岐阜スーパース（Bリーグ）・ハンドボール（飛騨高山ブラックブルズ岐阜（JHL：女子）・ソフトテニス：太平洋工業ソフトテニス部・卓球：十六銀行卓球部（女子）・朝日大学体育会卓球部（男子）・バドミントン：丸杉バドミントン部

##### 3. 活動内容

- (1) 様々な競技体験や運動遊び、学校における楽しい体育に親しむ機会の創出
- (2) 試合・イベント等への招待
- (3) トップを目指す次世代アスリートへの質の高い指導
- (4) スポーツを通じた岐阜県の魅力の発信
- (5) トップチームに関する情報や連携活動の効果的な発信
- (6) トップチーム間の交流促進
- (7) 地域課題解決に向けた県内各地域イベント等への協力等

FC岐阜ホームページ（2022.04.26（Tue）<sup>6)</sup>）から引用

### 1.3 岐阜地域の「みるスポーツ」の現状（若年者（高等学校生）の参加実態）

2024年12月に岐阜協立大学（以下、本学とする）が位置する岐阜県大垣市の高等学校に在籍する3年次生徒の34名を対象とした直接スポーツ観戦の実態調査<sup>9)</sup>をした。その結果、この1年間で直接スポーツ観戦経験がある生徒は、15名（44.12%）であった。一方、19名（55.88%）は経験がないと回答した。直接スポーツ観戦の回数別では、1回と2回がそれぞれ2名（調査対象生徒全体の5.88%）、3回と4回がそれぞれ1名（2.94%）、5回が2名（5.88%）、6回以上が8名（23.53%）であり、中には10回を超える直接スポーツ観戦経験を有する者もあった。主な観戦種目は、野球（主に硬式野球）、サッカー、バスケットボール、バレーボール、陸上競技、アメリカンフットボールといった種目が回答された。この大垣市内の高校生を対象とした「直接スポーツ観戦の参加実態調査」では、直接スポーツ観戦の参加率は、全国調査と比較して高値ではあった。また、観戦経験ゼロの生徒と年間に複数回の観戦経験を有する生徒に分かれ、二極化傾向が認められた。さらに、観戦した種目は、野球（高校野球も含む）やサッカー、バレーボール、バスケットボール、女子ソフトボールといった種目に限定的であった。

### 1.4 研究課題の所在

スポーツビジネスの観点から「みるスポーツ」を一つの産業と考え、老若男女問わず、より多くの顧客にスタジアムやアリーナに足を運んでもらい（来場してもらい）、チケットを購入して試合をレジャー・娯楽の一つとして、継続的に年間に複数回観戦してもらうためにはそのニーズを的確に把握する必要がある。それ以前に、まずはマーケティングをするためには消費者の参加（直接スポーツ観戦）実態を把握する必要がある。

#### 1.5 若年者のみるスポーツへの参加実態

前報では、みるスポーツをスポーツ産業の観点からの価値を報告した<sup>8)</sup>。ここでは中学校や高等学校、大学といった教育機関の課外活動としてのスポーツ系（運動系）部活動（クラブ活動）の応援ではなく、プロ野球やサッカーJリーグ・WEリーグといったトップスポーツリーグの試合をチケット購入して、アリーナやスタジアムで直接観戦する消費者、特に大学生などの若年者を対象に調査・分析した結果を報告した。その内容は、スポーツを専攻する学生では「この1年間に直接スポーツ観戦の経験あり」と回答したのは48.15%で、特に高等学校での運動系部活動に所属経験のある学生では51.85%と高値を示し、スポーツ庁などのスポーツ活動実施状況に関する世論調査（全国調査）よりも高い参加率の結果を得た。また、運動系部活動所属経験ありの学生では、年間直接スポーツ観戦の回数平均値は2.87回であり、年間に複数回観戦した学生の割合は24.69%であった。さらに、運動系部活動所属経験がある学生が直接スポーツ観戦で要した費用（観戦に伴う交通費や飲食、グッズなどの購入含む）の平均額は、12,000円/回であった。直接スポーツ観戦で使用できる予算額（許容できる金額）平均値は、運動系部活動所属経験あり学生では、13,093.18円/回に対して、運動系部活動の所属経験がない学生では15,133.33円/回との回答を得た。さらに、運動系部活動所属に関わらず、今後の直接スポーツ観戦の参加希望の意識では、どちらも「とても参加したい」および「観戦したい」と75%以上が回答し、消費行動が顕在化はしていないが直接スポーツ観戦の潜在的マーケットがある可能性を報告した。

#### 1.6 アフターコロナでの直接スポーツ観戦参加率（スタジアム等での直接観戦）の（2021年から）の回復

レジャー白書によると、直接スポーツ観戦の参加率を次の通り報告している。全体の平均値は、2019年（n=1,665）では37.2%であったが、コロナ禍にあった2021年（n=1,634）値は、18.4%まで減少した。その後、2023年（n=1,435）値は、29.6%まで増加し回復したが、コロナ禍以前までは至っていない。これを性別毎に傾向を見てみると男性では2019年（n=868）値が41.7%であったが、2021年（n=825）値では、23.4%に減少し、2023年（n=727）値では33.0%まで増加し、回復傾向にある。一方、女性では2019年（n=797）値が、32.4%であったのに対して2021年（n=809）値は、13.3%まで減少したが、2023年（n=708）値では、26.1%まで回復傾向にある<sup>1-5)</sup>。

#### 1.7 本研究での課題（リサーチクエッション）

前記の全国調査を概観すると今後の長期的な顧客として期待される10代や20代の若年層（大学生を含む）のスタジアムやアリーナといった現地での直接スポーツ観戦への参加率は決して高くはない。今後この世代を新たな顧客（現地観戦者）として取り込むためには、その特性を顕在化する必要がある。これまでの先行研究では、主にサッカーやバスケットボール、ハンドボールといった特定の競技種目の試合にて現地にて観戦者を対象に調査が実施され、その特性が検討されてきたがより多くの競技種目を対象に、直接スポーツ観戦の経験がある者とそうでない経験がない者の特徴を検討する必要があるであろう。

#### 1.8 研究目的

本研究では、本学初年次学生でスポーツを専攻し、高等学校時に岐阜地域に居住した学生の高等学校時の「みるスポーツ」の経験や認識を調査・分析することで岐阜地域の若年者の直接スポーツ観戦の顕在化されたニーズと潜在的需要を明らかにすることを目的とした。高等学校生や大学生といった若年者のみる

スポーツの需要の実態の把握は、新規顧客を発掘するためにも重要な基礎資料になる。また、その認識の特徴を明らかにすることも併せて検討する。さらに、近年、岐阜地域ではみるスポーツの環境が充実した。サッカーのFC岐阜だけでなく、バレーボールのVリーグやバスケットボールBリーグ、女子ソフトボールのJDリーグといったトップスポーツリーグで活動するチームが増え、それらのチーム・クラブが「ギフトナイト」として連携を図っているからである。そのため、高等学校時に岐阜地域に居住していた学生のみるスポーツへの参加は、ほかの地域よりも高いのではないかと推測し、その実態を確認することも目的とした。そのため、本研究ではスタジアム（競技場）やアリーナ（体育館）での直接スポーツ観戦の経験を高等学校時に岐阜地域と東海地域に居住したスポーツ学生にて比較検討を試みる。それにより地域特性を明らかにし、若年者をターゲットにした「みるスポーツ」のマーケティングの基礎的資料を得る。

## 2. 研究方法（調査方法）

### 2.1 調査対象者

本研究で調査対象となったのは本学にてスポーツ経営を専攻する初年次学生の109名（内、女子学生23名）である（表1）。今回は、高等学校時に岐阜地域に居住した学生の特徴を明らかにするため、東海地域（愛知県・三重県・静岡県・長野県（長野県を東海地域に含めた理由は下記に説明した））に居住した学生と比較検討を試みた。そのため、高等学校時に岐阜地域に居住した学生は37名（内、女子学生9名）と東海地域に居住していた学生48名（内、女子学生9名）を分析対象とした。なお、北陸地域の8名、関西地域の7名、九州地域の5名、北海道及び東日本の4名といった地域に居住していた24名は標本数が少なかつたため分析対象から除外した。なお、長野県は信越地域に属するが、東海地域が属する中部地方の一つの県であることや岐阜地域に隣接し、特に、県南地域は東海地域へのアクセスが良かったため直接スポーツ観戦の環境が類似すると考え、東海地域に含めて比較対象とした。

表1 地域別の調査対象学生数

地域 / 性別	男子学生		女子学生		学生全体	
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)
岐阜	28	32.56	9	39.13	37	33.94
東海	39	45.35	9	39.13	48	44.04
北陸	7	8.14	1	4.35	8	7.34
関西	6	6.98	1	4.35	7	6.42
九州	2	2.33	3	13.04	5	4.59
北海道・東日本	4	4.65	0	0.00	4	3.67
	86	100	23	100	109	100.00

単位:人数

### 2.2 調査方法

集合法による自記式質問紙調査法を用いた。過去の研究報告<sup>7-8)</sup>を参考に直接スポーツ観戦に関する調査用紙を作成し、無記名にて回答させた。回答させる前に口頭にて本研究の調査主旨や記入方法、倫理的配慮について説明した後、その場で記入させ、記入後に直ちに調査用紙を回収した。回収率は100%であった。回答は、およそ20分間程度であった。

### 2.3 質問項目

#### 2.3.1 基本的属性

基本的属性として、居住地(直近の1年間=高等学校3年次)、年齢、性別、大学での運動・スポーツ系の部活動・サークルの所属の有無と活動種目を回答させた。

### 2.3.2 直接スポーツ観戦の経験について

この1年間の直接スポーツ観戦経験の有無およびその回数、観戦した競技種目、直接スポーツ観戦の誘因項目(11項目から選択して複数回答)、過去3年間(高等学校時)の直接スポーツ観戦の経験があるスポーツ種目(24種目から複数回答)の4つの質問に回答させた。

### 2.4 調査時期

この調査は、2024年6月に全ての調査を実施し、1日のみで完結した。

### 2.5 倫理的配慮

調査を始めるにあたり、調査対象となった学生に対して口頭にて研究主旨と意義、調査方法、結果の公開においては統計処理され集団として結果を表するため個人情報保護は保護され個人が特定されない、途中での中止が可能でそれによる不利益がないことを説明し、同意を得たうえで回答させた。本研究は、岐阜協立大学研究推進委員会「岐阜協立大学における研究者の行動規範」を遵守して遂行した。

### 2.6 用語の定義

#### 2.6.1 直接スポーツ観戦(直接現地でのスポーツ観戦)

本研究では本学初年次学生でスポーツを専攻し、高等学校時に岐阜地域に居住した学生の高学校時の「みるスポーツ」の経験や認識を調査・分析することで岐阜地域の若年者の直接スポーツ観戦の潜在的需要を顕在化することを目的としている。そのため、本研究では「みるスポーツ」をスタジアム(競技場)やアリーナ(体育館)といった現地にて直接的にスポーツを観戦する行為行動とした。

#### 2.6.2 みるスポーツの対象(直接スポーツ観戦の対象)

“みるスポーツ”の観戦対象は、日本国内のトップスポーツリーグに属するプロ野球、サッカーJリーグやFリーグ、WEリーグ、バレーボールのVリーグ、バスケットボールのBリーグに加えて、女子ソフトボールのJDリーグやハンドボールの日本リーグなど、チケットを購入して観戦するスポーツを対象とした。また、大学生や高校生を対象とした野球やサッカー、ラグビーといった全国大会レベルの試合・大会の観戦も含めた。なお、今回は高等学校の硬式野球の地方予選大会や東海大会などの地区大会は調査対象に含まれた。一方、他のスポーツ種目と中学生以下の大会・試合といった仲間の応援が主となり、産業的要素を含まないものは観戦の対象外とした。

### 2.7 統計処理

岐阜地域群と東海地域群の若年者の直接スポーツ観戦の地域特性を検討するため、質問に対する回答を比較検討した。各群の特徴を検討するため、群間の比較は回答の標本数とそれに対する比率(割合)で示した。全ての集計・分析は、Microsoft 365のEXCELにて行った。地域特性を判断するため、出村ら(2001)の「比率に関する検定(Excelによる健康・スポーツ科学のためのデータ解析入門(大修館書店))」に従い比率に関する検定の母比率と標本比率の差の検定をした。危険率は5%未満で判定した

## 3. 研究結果(本調査で明らかとなった結果)と考察

### 3.1 本研究の調査対象(有効な標本(サンプル))

表2は、本研究で調査対象となったスポーツ学生の属性、すなわち高等学校在籍時の居住地および運動系部活動所属の有無ごとに群分けした調査結果を示した。直接スポーツ観戦経験有無には、競技レベルを問わず過去や現在の運動系・スポーツ系部活動の所属が作用すると考え、群分けして分析を試みた。し

しかし、運動系部活動の所属経験のないサンプル数が少ないため、所属の有無による結果において統計的有意な差は認められなかった。また同様に性差についても分析を試みたが有意差は認められなかった。そのため、本調査で得られた結果の分析では運動系部活動の所属の有無の差と性差は、分析対象とはせず、高等学校時の居住地のみを観点として分析をした。そこで、地域別に高等学校時の運動系部活動の加入・未加入別にサンプル数を実数値(件数)と割合(%)で示した。岐阜地域群と東海地域群ではどちらも高等学校時の運動系部活動の加入率が83.78%と91.67%と高値を示した。

表2 地域別の調査対象学生の運動系部活動の加入数

地域 / 加入区別	地域別 小計	加入 学生数	( % )	未加入 学生数	( % )
岐阜	37	31	83.78	6	16.22
東海	48	44	91.67	4	8.33
北陸	8	6	75.00	2	25.00
関西	7	5	71.43	2	28.57
九州	5	4	80.00	1	20.00
北海道・東日本	4	4	100.00	0	0.00
		94	100	15	100

### 3.2 本研究で得られた「この1年間での直接スポーツ観戦の有無」

表3は、高等学校時に岐阜地域に居住した学生（以下、岐阜地域群とする）と同じく高等学校時に愛知県、三重県、静岡県及び長野県に居住した学生（以下、東海地域群とする）、高等学校時に関西地域や九州地域、北海道・東日本地域に居住した学生（以下、その他地域群とする）及び今回調査対象となった学生全体（以下、全体とする）の直接スポーツ観戦の経験に関する回答を一覧である。

#### 3.2.1 地域別のべ直接スポーツ観戦の経験回数

表3は、岐阜地域群と東海地域群、その他地域群の高等学校3年次1年間での「のべ直接スポーツ観戦の経験回数」と直接スポーツ観戦の回数別人数である。

まず、全体での「のべ直接スポーツ観戦回数」値は、194件であり、一人当たりの平均値は1.78回/年（標準偏差3.93）であった。地域別の平均値では、岐阜地域群の平均値（標準偏差）が2.14回/年（3.81）、東海地域群が1.67回/年（4.58）、その他地域群が1.46回/年（2.36）であった。今回の調査結果では岐阜地域群と東海地域群の年間直接スポーツ観戦回数平均値を比較（t検定）したところ有意水準5%では統計的に有意差は認められなかった。

#### 3.2.2 地域別の直接スポーツ観戦の観戦回数

次に、年間の直接スポーツ観戦回数を岐阜地域群と東海地域群にて比較（ $\chi^2$ 検定）した。まず、直接スポーツ観戦がない0回は、全体で54件であり、49.54%となり、地域別では、岐阜地域群の40.54%（15名）、東海地域群の56.25%（27名）、その他地域群の50.00%（12名）という結果となった。年間0回、すなわち、直接スポーツ観戦経験がないスポーツ学生数では、東海地域群と比較して岐阜地域群のほうが統計的に有意に低値であり、東海地域群に比べて岐阜地域群のスポーツ学生の方が直接スポーツ観戦の経験がある者が多いと推測できる結果であった。

表3 地域別の直接スポーツ観戦の経験の有無と観戦回数

	n	岐阜地域	東海地域	その他地域		全体	
		37	48	24	109		
のべ直接スポーツ観戦回数	回数	79	80	35	194		
直接スポーツ観戦回数平均値		2.14	1.67	1.46			
標準偏差		3.81	4.58	2.36			
直接スポーツ観戦回数		p値					
0回(経験なし)	人数	15	27	0.00	*	12	54
	(%)	40.54	56.25			50.00	
1回	人数	9	10	0.06		6	25
	(%)	24.32	20.83			25.00	
2回	人数	4	4	0.06		0	8
	(%)	10.81	8.33			0.00	
3回	人数	5	2	0.00	*	3	10
	(%)	13.51	4.17			12.50	
4回	人数	1	2	0.06		1	4
	(%)	2.70	4.17			4.17	
5回～10回	人数	1	2	0.60		2	5
	(%)	2.70	4.17			8.33	
11回以上	人数	2	1	0.02	*	0	3
	(%)	5.41	2.08			0.00	

2023年度に実施した調査では、高等学校での運動系部活動所属の有無と直接スポーツ観戦の関連を検討（本研究とは異なる2023年の独自のデータ<sup>8)</sup>）した結果では、「経験あり」が48.15%に対して「経験なし」が51.85%であった。そのため、東海地域群とは同様な直接スポーツ観戦率であったが、本調査での岐阜地域群では、「観戦0回＝経験なし」が約10ポイント低い値を示した。ただし、コロナ禍直前にてスポーツ学生を対象とした直接スポーツ観戦の実態調査<sup>7)</sup>では、「観戦0回」は29.03%であったことから、高等学校生の直接スポーツ観戦は未だコロナ禍以前には回復していないのではないかと推測される結果が明らかとなった。

続いて、年1回、2回、4回、5回～10回の直接スポーツ観戦では、両群の人数に統計的に有意差は認められなかった。一方、年間3回及び11回以上では有意差が認められた。岐阜地域群では年1回が最も多く9名(24.32%)で、同様に2回が4名(10.81%)、3回が5名(13.51%)であり、48.65%が3回以下であった。一方、東海地域群でも、年1回が20.82%と最も多くを占め、次いで年2回が4名(8.33%)、年4回と年5～10回が2名(4.17%)であり、年3回以下が33.33%となった。この人数の分布から3回以下は、岐阜地域群の方が東海地域群よりも多く、年4回以上の直接スポーツ観戦では東海地域群が多いという結果であった。このことから、岐阜地域群では、東海地域群と比較して直接スポーツ観戦者の絶対数は多いが、その回数は3回以下が多くなる。一方、東海地域群では、直接スポーツ観戦経験者の割合は岐阜地域群と比較して少ないが、その回数は4回以上となる者もあり、岐阜地域群と比較して直接スポーツ観戦回数が多いと推察される結果であった。

なお、本研究では分析の対象外となったその他地域群でも同様に年1回の直接スポーツ観戦が最も多く、25.00%（6名）を占めた。さらに、いずれの地域も観戦回数が増加すると件数は減少する傾向を示した。

レジャー白書<sup>1-5)</sup>による年代別の「みるスポーツ」への参加率では、10代男性の参加率は、2017年から2022年の参加率は、9.1から21.4%（2022年：9.1%、2021年：16.7%、2020年：19.6%、2019年：19.0%、

2018年：12.5%、2017年：21.4%）と報告されている。今回の結果は全国調査の結果よりも高値を示しており、本研究で調査対象となつたいずれの地域に居住したスポーツ学生の直接スポーツ観戦の参加率は、全国調査と比較して高値である。しかし、コロナ禍直前と今回の調査では参加率に差があり、コロナ禍後の参加率が十分回復したとは言えない結果であった。そのため、直接スポーツ観戦の地域特性を検討するためには今後も継続的な調査が必要と考える。

### 3.3 地域別の直接スポーツ観戦したスポーツ種目（上位11項目）

表4は、高等学校3年間での直接スポーツ観戦したスポーツ種目の一覧である。岐阜地域群で最も多く回答されたのが「高校野球（甲子園大会及びその予選）」で20件（岐阜地域群の学生が高等学校で回数を問わず直接スポーツ観戦をしたスポーツ種目の54.05%）であった。次いで「サッカー（Jリーグ）」の32.43%（12件）であった。さらに、「プロ野球」が29.73%（11件）となり、この地域では野球が上位となる傾向が認められた。一方、東海地域では、「マラソン・駅伝」が最も多く25.00%（12件）となった。次いで「高校野球」が22.92%（11件）、「プロ野球」が20.83%（10件）となり、この地域でも野球が上位になる傾向が認められ、岐阜地域と東海地域の主に高等学校に在籍する若年者層では「野球」にニーズがあることが理解できる結果を得た。なお、その他地域では、「サッカー（Jリーグ）」や「マラソン・駅伝」、「バスケットボール（Bリーグ）」といった種目での直接スポーツ観戦が多く認められ、岐阜地域と東海地域とは異なる傾向を示した。なお、バスケットボール（Bリーグ）では岐阜地域群と東海地域群に有意差が認められたが、観戦者数のサンプル数が小さく今後の調査が必要である。バスケットボール（Bリーグ）やバレーボール（Vリーグ）、女子ソフトボール（JDリーグ）は、バレーボールのJAぎふリオレーナとバスケットボールの岐阜スーパースが岐阜市地域がホームタウン、女子ソフトボールの大垣ミナモトソフトボールクラブは大垣市をホームタウンであるため観戦者数が多くなると予測したがいずれも直接スポーツ観戦者は少数であり、東海地域群との明確な違いを示す結果や傾向は得られなかった。

今回の調査で岐阜地域群の方が東海地域群と比較して直接観戦者が多いと有意差が認められるのは、「高校野球（甲子園大会・予選）」、「プロ野球」、「サッカーJリーグ」、「バスケットボール（Bリーグ）」の4つの項目であった。特に、「高校野球（甲子園大会・予選）」にて大きな差が認められた。したがって、岐阜地域の高校生を含む若年者での直接スポーツ観戦は、『「高校野球（甲子園大会・予選）」を1から3回観戦する』という特徴があるといえる。一方、東海地域群では、「マラソン・駅伝」と「ラグビー（リーグワン）」にて岐阜地域群よりも有意に観戦者数が多いと認められた。東海地域の愛知県や静岡県では、プロ野球（中日ドラゴンズ）やサッカーJリーグ（名古屋グランパスエイト、ジュビロ磐田、清水エスパルスなど）、バレーボールVリーグ、バスケットボールB1リーグと身近に直接スポーツ観戦の環境が整っているため、観戦者数が多くなると予測したが異なる結果となった。今回の調査結果では、56.25%の東海地域群の学生が直接スポーツ観戦をしていないがことは明らかとなったが、その理由は不明である。そのため、東海地域の若年者の直接スポーツ観戦に関する潜在的需要を検討するためには継続的な調査が必要であり、その結果を分析して理由を明らかにしなければならない。

### 3.4 直接スポーツ観戦への参加誘因項目（参加理由）

直接スポーツ観戦参加に繋がる誘因項目（参加理由）を8項目から複数回答させた。それぞれ上位になった項目を比較する。まず、岐阜地域群の学生が最も多く回答した項目は、「友人や家族に誘われたから」で78.38%となった。次いで「家族・友人が出演しているから」が72.97%、さらに「チケットがあったから（割引チケットがあったから）」が70.27%となった。一方、東海地域群では、チケットがあったから（割引チケットがあったから）と「家族・友人が出演しているから」が最も多く選択回答され64.58%となった。次いで「友人・家族に誘われたから」が61.42%となった。

表4 地域別の直接スポーツ観戦の上位11種目

n	岐阜	東海	p値	その他		
	37	48		24	小計	
高校野球(甲子園大会・予選) 人数	20	11	0.00	*	4	35
(%)	54.05	22.92			16.67	
プロ野球 人数	11	10	0.02	*	4	25
(%)	29.73	20.83			16.67	
サッカー・Jリーグ 人数	12	9	0.00	*	7	28
(%)	32.43	18.75			29.17	
マラソン・駅伝 人数	3	12	0.00	*	6	21
(%)	8.11	25.00			25	
ソフトボール・JDリーグ 人数	2	2	0.06		0	4
(%)	5.41	4.17			0.00	
バスケットボール・Bリーグ 人数	4	1	0.00	*	4	9
(%)	10.81	2.08			16.67	
バレーボール・Vリーグ 人数	2	3	0.06		6	11
(%)	5.41	6.25			25.00	
陸上競技 人数	7	8	0.06		4	19
(%)	18.92	16.67			16.67	
フットサル・Fリーグ 人数	1	0			2	3
(%)	2.70	0.00			8.33	
格闘技・空手・大相撲 人数	2	4	0.06		1	7
(%)	5.41	8.33			4.17	
ラグビー・リーグワン 人数	1	3	0.04	*	0	4
(%)	2.70	6.25			0.00	

岐阜地域群及び東海地域群では、多少の順位は異なるが、同様な項目が選択され上位となった。一方、その他地域群やスポーツ庁の全国調査の結果ではそれ以外の項目が選択回答されており、相違が認められた。

今回の調査では「チケット(割引)がある」や「応援する選手がいる」、「友達や家族の誘い」、「友達や家族が出演している」といった項目が65.00%以上となる回答を得た。

東海地域群と比較して岐阜地域群が統計的に多く選択された項目は、「友人・家族に誘われた」、「そのスポーツをしているから」、「チケットがあったから」、「家族・友人が出演している」の4つの項目である。一方、東海地域群では、「応援しているチーム・クラブがある」と「応援している選手がいる」の2つの項目が岐阜地域群よりも多く選択された。これらの結果は、岐阜地域と東海地域の若年者を直接スポーツ観戦の消費者として、消費行動をさせるためのマーケティングをする場合、異なるアプローチ求められると推察できる。例えば、岐阜地域であれば、「そのスポーツを実施している」または「家族・友人が出演している」若年者をターゲットに「友人・家族の誘い」が起きやすいように「ペア・グループ割引があるチケット」を発売することで消費行動を起しやすくなる可能性は否定できない。一方、東海地域であれば「応援するチーム・クラブ」や「応援する選手」がいる若年者を対象にマーケティングをする必要がある。そのため、チーム・クラブは、地域密着した日常的な活動や個々の選手の「顔」が見える活動といった「チーム・クラブ」及び「選手」と観戦者との距離感を意識したアプローチが求められるであろう。

表5 地域別の直接スポーツ観戦の誘因

		岐阜地域	東海地域	p値	その他地域	全国調査
	n.	37	48		24	592
応援しているチーム・クラブがあるから	%	37.84	47.92	0.02	* 50.00	26.70
	n	14	23			
そのスポーツが好きだから	%	54.05	56.25	0.06	45.83	63.20
	n	20	27			
暇つぶし・時間があれば	%	40.54	41.67	0.06	25.00	17.70
	n	15	20			
応援している選手がいるから	%	48.65	54.17	0.05	* 41.67	24.50
	n	18	26			
友人や家族に誘われたから	%	78.38	61.42	0.00	* 50.00	17.20
	n	29	29			
そのスポーツを実施しているから(現在)	%	64.86	56.25	0.03	* 58.38	17.90
	n	24	27			
チケットがあったから	%	70.27	64.58	0.05	* 45.83	4.70
	n	26	31			
家族・友人が出場しているから	%	72.97	64.58	0.03	* 62.50	5.40
	n	27	31		62.50	5.40

#### 4. まとめ

本研究では、高等学校時に岐阜地域と東海地域に居住したスポーツ学生を対象に直接スポーツ観戦の実態を調査し、地域特性を明らかにしようとして、その結果を分析することにより、若年者をターゲットにした「みるスポーツ」のマーケティングの基礎的資料を得ることを目的とした。その結果以下のことが明らかとなった。

(1) 調査対象となったスポーツ学生の高等学校3年次の直接スポーツ観戦の平均回数は岐阜地域群(n=37)が2.14±3.81、東海地域群(n=48)が1.67±4.58であり、直接観戦経験がない(0回)は、岐阜地域群が15名(40.54%)、東海地域群が27名(50.27%)であった。

(2) 年間直接観戦回数では、岐阜地域群の年3回未満が48.65%(18名)であるのに対して、東海地域群では33.33%であった。年3回以上は両群とも10%程度であった。

(3) 直接観戦した競技種目では、岐阜地域群が高校野球、プロ野球、サッカーJリーグにて東海地域群と比較して統計的有意に多い結果となった。一方、東海地域群では、マラソン・駅伝が有意に多い結果となり、岐阜地域では野球、特に高校野球の直接観戦が多い結果となった。

(4) 直接観戦の誘因項目では、「友人・家族の誘い」、「友人・家族が出場」、「チケットがある」、「そのスポーツをしている」の4項目で岐阜地域群が東海地域群よりも多く選択された。一方、東海地域群では「応援しているチーム・クラブ」と「応援している選手」の2つの項目で有意に多く選択された。

これらの結果から、岐阜地域と東海地域での若年者の直接スポーツ観戦行動には、相違がある可能性がある。スポーツ・マーケティングの観点からは、誘因項目に統計的有意差が認められたため、地域特性に応じたアプローチを考える必要があることが示唆された。また本研究では、岐阜地域の出身学生には「高校野球」の直接観戦経験がある者が多く認められたため、この観戦経験を他の競技スポーツ種目への拡大となる「きっかけ」の一つとなる様なマーケティングも考える必要がある。

## 参考文献・引用文献

- 1) 公益財団法人日本生産性本部（2017）レジャー白書 2017，趣味・娯楽部門，余暇活動への参加・消費の実態（2016），p39
- 2) 公益財団法人日本生産性本部（2018）レジャー白書 2018，趣味・娯楽部門，余暇活動への参加・消費の実態（2017），p39
- 3) 公益財団法人日本生産性本部（2019）レジャー白書 2019，趣味・娯楽部門，余暇活動への参加・消費の実態（2018），p43
- 4) 公益財団法人日本生産性本部（2020）レジャー白書 2020，趣味・娯楽部門，余暇活動への参加・消費の実態（2019），p39
- 5) 公益財団法人日本生産性本部（2021）レジャー白書 2020，趣味・娯楽部門，余暇活動への参加・消費の実態（2020），p43
- 6) FC 岐阜(2022)GIFUトップチーム連携プロジェクト「GIFUNITE(ギフユナイト)」加盟のお知らせ, [https://www.fc-gifu.com/news\\_information/88448.html](https://www.fc-gifu.com/news_information/88448.html) (最終アクセス 2025 年3月 20 日)
- 7) 古田康生, 小原慶祐, 原田理人, 山本孔一, 渡部昌史(2020) 大学初年次学生の“みる”スポーツの実態, 岐阜協立大学論集52巻2号, p21-29
- 8) 古田康生(2023)スポーツ産業の観点から見た学生の直接スポーツ観戦の実態, 地域創生第 43 集, 53-66
- 9) 古田康生(2024)大垣市内の高校生を対象としたみるスポーツの参加実態調査, 未公開資料
- 10) 文部科学省スポーツ庁(2011), スポーツ基本計画, [https://www.mext.go.jp/sports/b\\_menu/sports/mcatetop01/list/1372413.htm](https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop01/list/1372413.htm) (最終アクセス 2025 年 3 月 9 日)

## 付記

本研究を遂行するにあたり、調査主旨をご理解の上、調査に協力して頂いたスポーツ経営専攻学生の皆様に深く感謝いたします。本論文で開示すべき利益相反事項はない。